

じんけん くらしの扉

淡路市人教役員だより No.46

「全国人権・同和教育研究大会に参加して」

淡路市人教会長：山添 繁

福島からの自主避難で、横浜に転居してきた家族の児童が不登校になった背景には、「放射能」「菌」などと揶揄されたいじめの実態があった。「いままでなんかいも死のうとおもった。でもしんさいでいっばい死んだから つらいけどぼくはいきるときめた」という被害児童の心の叫びを私たちは真摯に受け止めなければならない。「なぜ、被害者が差別を受けなければならないのか。」「いつまでこのような差別の構造が続くのか。」と暗澹たる気持ちで、11月26、27日に大阪で開催された全人教研究大会に参加した。

分科会場は、目の前にある人権課題に誠実に向き合い、差別を無くしたいという思いで実践している人々の熱とエネルギーで溢れていた。「自分の周りで差別的な言動がなされ、それに同調する雰囲気が多勢の中で、どう向きあえばいいのか。」という一人の若者の本音の発言に応じて、自分の体験を踏まえて語る先達の姿があった。完全アウェイの中で、「差別はおかしい」と発言することは容易なことではない。横浜の事象でも、周りで「声を上げたい」と感じた児童はいたはずである、しかし、いじめがある学級では、自分に回ってくる恐れがあり覚悟がある。大人であっても、友達・同僚との人間関係を壊したくないと躊躇してしまう。確かに、多数対1人では難しいかもしれないが、信頼できる友達には「これっておかしいよね」と話せるはずだ。そのことから始めよう。そのようなアドバイスがあった。

本大会では、初めて高校生から実践報告もなされた。その高校生の人権意識の高さは、紛れもなく小中の人権教育の積み重ねから生まれている。

冒頭述べたいじめ問題を解く鍵は、「子どもの姿から学ぶ」「徹底して子どもに寄り添う」という、同和教育の理念を基軸とした人権教育の実践の延長線上にある。



兵庫県人権教育研究協議会を代表して、南あわじ市の社会福祉法人みかり会 幼保連携型認定こども園 松帆南所属の高崎祐太さんが、「男性保育士から見た男女共生」と題して、提案発表を行いました。この大会でも、高崎さんの実践発表は、女性職場といわれる保育業界での男性保育士の奮闘ぶりを、新しい視点の切り口で大変高く評価されました。

(以下、記述)

「男性保育士への世間の認知度が低く、男女共に働きやすい職場環境とはいえない現状です。高崎さん自身、保育実習の受け入れの際に「男性だから」と断られたり、就職の際に「設備が整っていない」「男性は保護者も子どもも不信感を抱くから必要ない」と面接すらしてくれなかったといえます。更に、世間から見た男性保育士のイメージ（パワフルでダイナミックな遊びが得意）という固定概念とも向き合い、「自分らしさ」や「自分しかできない事」の役割創出に自信が持てるまでの体験を發表されました。

「男性だから」「女性だから」の考え方を払拭させ、男女が信じて任せる「信任」、信じて認める「信認」し合える職場づくり・社会づくりに励んでいきたい。と熱弁で語られました。

第68回全国人権・同和教育研究大会が大阪府で開催

であう つながる 『ひと なかま まち』

11月26日(土)・27日(日)の2日間、大阪府下22分科会場に分かれ、研究大会が開催されました。(淡路市より14人が参加しました。)

■男性保育士に向けられた課題

男性保育士への世間の認知度が低く、男女共に働きやすい職場環境とはいえない現状です。

■より良い職場・社会づくり

「男性にしかできない仕事、女性しかできない仕事」なんでものはない事を自分の業務に対する姿勢・意欲を通じて伝えていきたい。みかり会には、3人の男性保育士がおり、それが当たり前だと子ども達には思っている。

子ども達の将来の夢を広げ、性別が理由で諦めなければならぬ職業とはならないようにしたい。



「わいわいサークル」卓球バレー全国大会風景

□卓球バレーとは？

卓球台を使用して、6人制バレーボールのルールに準じて、ピン球を3打以内で相手コートへ返すゲームです。障がいのある人も軽い人も健常者も、視覚・聴覚・肢体・知的の障がいのある人もみんな一緒に出来るユニバーサルスポーツの代表です。